

自然教育園の動物目録の追録と 稀種動物の目撃記録 (17)

久居 宣夫*

Notes on Newly or Rarely Observed Animal species
in the Institute for Nature Study (17)

Nobuo Hisai*

はじめに

今回は、2006年1月から2006年12月までに新たに生息が確認されたり、目撃された種あるいは前報(久居, 2006)までに記録がもれた種について報告する。稀種については、「動植物目録」(国立科学博物館附属自然教育園, 1984)中で、r: “稀”, または (r): “古い記録はあるが、現在未確認の種”とされている全ての種を対象にしたが、これら以外にも最近特に個体数や目撃記録が著しく減少した一部の種も対象とした。

なお、日付は目撃あるいは捕獲した西暦年月日を、以下目撃または捕獲地点(図1参照)および目撃者、捕獲者名をそれぞれ示し、氏名のない場合は筆者の記録によるものを示す。

本報告をまとめるにあたって、日頃より種々のご教示を賜っている大野正男東洋大学名誉教授、同定をしていただいた名城大学の有田 豊教授、国立科学博物館動物研究部の大和田守博士、同小野展嗣博士、同篠原明彦博士、また、日頃より貴重な情報を提供して下さった下記の方々に感謝の意を表する次第である(50音順、敬称略)。

飯田晋一郎(SI)、大澤陽一郎(YO)、神森芳行(YK)、加藤武久(TK)、桑原香弥美(KK)、三枝近志(CS)、須田研司(KS)、福田盛明(MF)、矢野 亮(MY)、吉井三恵子(MYO)、吉野由美子(YY)、若松克己(KW)

1. 追 録

節足動物門 Arthropoda

クモ綱 Arachnida

スズミグモ *Cyrtophora moluccensis* (Doleschall) (クモ目コガネグモ科)

2006.8.9 路傍植物園 1♀ 小野展嗣氏同定

正門に近い路傍植物園の約3mの高さの木立に網を張っている個体を捕獲した。

本種は色彩変異が大きく(千国, 1989)、捕獲された個体は腹部背面が一様に赤茶色で複雑な斑紋

*国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Museum of Nature and Science, Tokyo

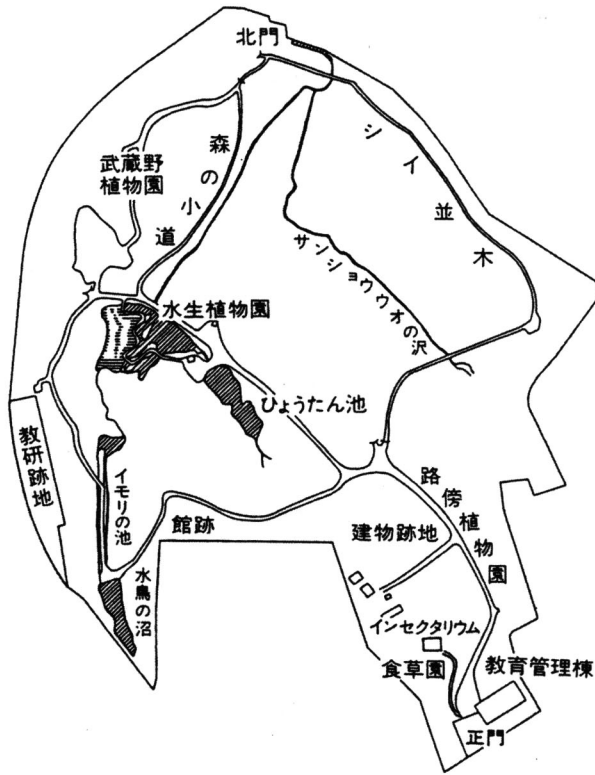


図 1. 自然教育園概略図

は目立たなかった。網は直径30~80cmのドーム型で、日当たりのよい樹間に張る（八木沼, 1986; 千国, 1989）。

本種は南方系で本来は本州南部以西に生息するが、温暖化の影響によって最近では埼玉県の武蔵丘陵森林公園（小野, 私信）や千葉県（千葉県史料研究財団, 2003）でも記録されている。しかし、皇居および赤坂御用地では未記録である（小野, 2000, 2005, 2006）。

甲殻綱 Crustacea

ヌカエビ *Paratya compressa improvisa* Kemp（エビ目ヌマエビ科）

記録がもれていた種である。2004年および2005年に園内の水系を浚渫したおりに、水鳥の沼やイモリの池、ひょうたん池から多くの個体が保護された。

本亜種が愛知県（太平洋側）～新潟県（日本海側）以北に分布するのに対して、近似亜種のヌマエビ *Paratya compressa compressa* は南方系で本亜種の分布域以南に生息する（三宅, 1982）。

昆虫綱 Insecta

ヨコヅナサシガメ *Agriosphodrus dohrni* (Signoret)（カメムシ目サシガメ科）

2006.6.6 水生植物園; 11.25 森の小道 (KW)

本種は温暖化による影響でいずれは本園にも侵入することが予測されていた。本種は晩秋にサクラなどの樹幹で樹皮の裂け目などにもぐって5齢幼虫で集団越冬することが知られている。そのため、2004年12月に大野正男氏と園内に生育するサクラの樹幹を調べたが、この時は越冬幼虫を発見できなかった。このような状況から、今回見つかった成虫はおそらく2005年の秋に幼虫が侵入し、春に羽化した個体と推測される。上記の11月25日の記録は1個体ではあるが越冬直前の5齢幼虫が見つかったもので、本種はいずれは園内に定着すると考えられる。このほか、筆者は2004年11月7日に東京都八王子市の片倉城跡公園で越冬幼虫を観察している。

大野(1991)によれば、本種は帰化昆虫の一種で、日本では1928年の進士織平の宮崎県からの記録が最初と考えられ、その後1950年代までに九州各地に、1991年には中国・四国・近畿にまで分布を広げているという。そして、最近では茨城県北部(廣瀬, 1998)など関東地方でも広い地域で記録され(大野, 私信)、さらに、離島の八丈島(八木下, 1994)でも見つかっている。

コノハチョウ *Kallima inachus eucerca* Fruhstorfer (チョウ目タテハチョウ科)

1979.7.27 ひょうたん池付近 1♂

記録がもれていた種である。本園職員の萩原氏が捕獲した新鮮な個体の標本が残されている。翅などの状態から南方から飛来したいわゆる“迷蝶”とは考えられず、放蝶あるいは飼育個体の逸出と考えられる。本種は沖縄本島・石垣島・西表島に分布する(福田ほか, 1983)。

オオミノガ *Eumeta japonica* (Heylaerts) (チョウ目ミノガ科) (図2)

2006.3.12 教育管理棟前

ソメイヨシノの枝に付いていた囊が3個見つかった。

本種は日本ではもっとも大型のミノガで、以前は市街地の街路樹などの枝先についているのが時々見られた。食餌植物はカキ・ウメ・プラタナス・クリ・サクラなど多岐にわたり、時にはかなりの食害がある(奥野ほか, 1977; 井上, 1982)。老熟幼虫で越冬し、翌春そのまま囊の中で摂食せずに蛹化する(井上, 1982)。分布は本州～九州・南西諸島である。

本種は1990年代の半ばから、東京や大阪・福岡など各地の都市で激減する現象が知られ、その原因は帰化種のオオミノガヤドリバエ *Nealsomyia rufella* の寄生が大きいことが明らかにされている(山本ほか, 1998; 新津, 2006; 三枝, 2006; 山本・金沢, 2006)。

セミヤドリガ *Epipomponia nawai* (Dyar) (チョウ目セミヤドリガ科) (図3)

2006.8.11 正門前 KK 大和田守氏同定

正門前のケヤキに止まっていたセミ(ヒグラシまたはツクツクボウシのいずれか)が飛翔したさいにセミの体から落ちた幼虫を桑原氏が飼育し、8月25日に羽化したものである。

大串(1987)によれば初期の幼虫は胸部と腹部の境目に出現し、成長するにつれて腹部の先の方に移動し、5齢になると白蠟物質を分泌して腹面以外の体表面を覆い、成熟した幼虫は寄主から離れて糸を吐いて地上に降り、白蠟物質で繭を作り、その中で蛹化する。幼虫期間は約2週間、蛹期は8～15日である。寄主はヒグラシやアブラゼミなど6種が知られているが、その中でもヒグラシへの寄生が圧倒的に多い。

野外で繭が作られる場所はヒノキやスギの幹の樹皮上が約50%でもっとも多く、次いで林内に落ちている枝や葉が33%、下草と低木の枝や葉がそれぞれ7~8%である(須知・石井, 1986)。

国内での分布は本州・四国・九州で、東京では赤坂御用地および皇居(大和田ほか, 2005, 2006)でも見つかっている。

ヒロヘリアオイラガ *Parasa lepida* (Cramer) (チョウ目イラガ科)

2006.8.24 水鳥の沼付近 KK; 10.14 正門付近 KK

いずれも幼虫の記録である。本種も暖地性の種で、近年の温暖化によって北上しつつある。皇居では見つかっていないが、埼玉県(埼玉昆虫談話会, 1999)や千葉県(千葉県史料研究財団, 2003)では記録されている。

本種は中国・インド・セイロンなどに分布し、日本では1921年に鹿児島市で初めて発見された移入種と考えられている(宮田, 1983)。しかし、その後は全く記録が途絶えたものの1960年に鹿児島市で再発見されて以来街路樹や庭木についたものが人為的運ばれて分布を広げたと考えられ、1979年頃には九州や倉敷市、関西各地などに分布が拡大した(宮田, 1983)。そして、1977年頃から西日本を中心に発生が目立ちはじめ、現在は太平洋側が東海地方(佐藤, 1987)、日本海側は富山県(根来, 1992)まで分布が広がっている。

幼虫はサクラやナンキンハゼ・クスノキなど種々の樹木の葉を食べ(宮田, 1983)、大阪ではサクラの大木が丸坊主になったという(中臣, 1987)。

ハラアカハキリバチヤドリ *Euaspid basalid* (Ritsem) (ハチ目ハキリバチ科)

2006.8.27 武蔵野植物園 篠原明彦氏同定

本種はオオハキリバチとネジロハキリバチに労働寄生することで知られ、完成した寄主の巣を破って侵入すると、全独房内の寄主の卵を自分の卵と交換し、その後各房を修理して閉塞する。そして、この改造労働に従事しているあいだ、蜂は寄主の巣から数日間外に出ない。さらに、本種が上記のハキリバチに寄生するのは、これらの巣が修復可能な樹脂を材料にして作られているからである(岩田, 1978, 1980, 1982)。

国内での分布は本州・四国・九州である(平嶋, 1965)が、ヤニハナバチに寄生して東南アジアから北上しているという(岩田, 1982)。

クロベッコウハナアブ *Volucella nigricans* Coquillett (ハエ目ハナアブ科)

2006.9.15 水生植物園

本種はハナアブ類としては大型で、体長は約20mmある。今回は、水生植物園に設置したスズメバチ用のトラップで捕獲された。都区内では皇居でも記録されており、幼虫はクロスズメバチの巣下の土の中から発見され、地下か樹洞に営巣されたスズメバチ類の巣がなければ本属の種は生息できないという(大原, 2000)。また、大石(1998)によれば本種を含むベッコウハナアブ属の幼虫はスズメバチやマルハナバチなどの巣に生息し、ハチの蛹や死骸などを食べて育つという。

国内での分布は本州・九州である(枝重, 1965)。

2. 稀種の記録

(1) 昆虫類

オオアオイトトンボ *Lestes temporalis* Selys (トンボ目アオイトトンボ科)

2006.11.24 水生植物園 5exs KS

最近急激に減少しているが、今回はかなり遅い時期ではあるが複数個体が見られた。水ぎわに樹木が生育する池沼に生息し、雌は水面上に張り出した枝の樹皮下に産卵する。

ヤブヤンマ *Polycanthagyna melanictera* (Selys) (トンボ目ヤンマ科) (図4)

2006.6.14 イモリの池 TK; 8.7 TK

以前はまれであったが、最近はしばしば目撃されるようになった(須田, 2002; 久居, 2004)。今回はイモリの池で水ぎわ近くのコケ類に産卵しているのが見られた。武蔵野植物園の小池で羽化したばかりの個体の脱皮殻が見つかったこともあり(久居, 1990)、園内で繁殖していると考えられる。

マルタンヤンマ *Anaciaeschna maltini* (Selys) (トンボ目ヤンマ科)

2006.8.20 水生植物園 4exs KS

2001年に初めて記録され、それ以後まれに見られる。

ハラビロトンボ *Lyriothemis pachygastra* (Selys) (トンボ目トンボ科) (図5)

2006.7.14 水生植物園 1♂ TK

本種は1952年に発行された「昆虫目録」(鶴田ほか, 1952)に収録されているが、その後全く記録が途絶えていたトンボの一種で、1974年から1977年まで長期にわたって緻密に行われたトンボ類の調査でも見つからなかった(頼, 1975, 1978)。

本種は平地や丘陵地の水生植物が繁茂する湿地などに生息し、幼虫は水生植物の根ぎわや水底の堆積物の下などにいる(浜田・井上, 1985; 石田ほか, 1988)。

国内では北海道南端から種子島まで離島を含め各地に分布するが、都区内にある大規模な緑地でも記録は少ないようで、皇居や赤坂御用地などでも見つかっていない(斉藤ほか, 2005)。

チョウトンボ *Rhyothemis fuliginosa* Selys (トンボ目トンボ科) (図6)

2006.7.30 水生植物園 1ex YK; 7.31 水生植物園 1ex KK; 8.20 水生植物園 KS

園内ではまれに飛来個体が見られ、2004年から毎年記録されている(久居, 2005, 2006)。本園に比較的近い皇居では、年によって多少のちがいはあるがかなりの個体数が見られることから(斉藤ほか, 2006)、一部の個体が皇居から飛来する可能性もある。

トノサマバッタ *Locusta migratoria* (Linnaeus) (バッタ目バッタ科) (図7)

2006.10.19 水生植物園 1ex YK

本種も1952年に発行された「昆虫目録」(鶴田ほか, 1952)に収録されているが、その後の記録はなく、1998年から2000年まで行われた生態系特別調査でも見つからなかった(山崎, 2001)。

かつては都内の草地でも比較的良好に見られた普通種で、都心から離れた江東区などでは現在でも生

息している緑地もある（ネイチャーリーダー協議会，2003）。しかし，都心およびその周辺地域では1965年ごろから減少したと考えられ（品田，1974），皇居（山崎，2000）や新宿御苑（自然環境研究センター，2003）では記録されていない。

セアカツノカメムシ *Acanthosoma denticaudum* Jakovlev （カメムシ目ツノカメムシ科）

2006.8.3 水生植物園 1ex

ツノカメムシ類は園内でまれに見られる。

クマゼミ *Cryptotympana facialis* (Walker) （カメムシ目セミ科）

2006.8.10 正門前 1ex; 8.11 正門前 1ex; 8.31 路傍植物園 1ex MY; 9.3 正門前 1ex, 水生植物園 1ex

ツマグロスケバ *Orthopagus lunulifer* Uhler （カメムシ目テングスケバ科）（図8）

2006.8.18 YK

特に珍しい種ではないが，本園での目撃例は少ないので記録しておく。分布は本州・四国・九州で，秋にアカメガシワなどの樹木上で見られる（宮武，1977）。

ヒナカマキリ *Amantis nawai* Shiraki （カマキリ目カマキリ科）

2006.7.13 現業舎付近 KK

本種は時々，園内の林床をすばやく歩いているのが見られる。

ジャコウアゲハ *Byasa alcinous* (Klug) （チョウ目アゲハチョウ科）

2006.9.20 水生植物園 1♀ KS

本種は2004年にも正門前で見つかっている（久居，2005）が，園内で発生する可能性はない。本園に比較的近い皇居では，毎年多くの個体数が発生していることから（久居ほか，2000，2006），一部の個体が皇居から飛来する可能性がある。なお，8月20日にも目黒駅前では本種の雌が目撃されている（須田，私信）。園内での記録ではないが参考までに挙げておく。

キアゲハ *Papilio machaon hippocrates* C. et R. Felder （チョウ目アゲハチョウ科）

2006.4.20 食草園付近 1ex MY; 8.11 正門付近 1ex; 9.21 水生植物園 1ex MY

本種はふつう水生植物園でよく見られ，上記のような場所での記録はまれである。

モンキアゲハ *Papilio helemus nicconicolens* Butler （チョウ目アゲハチョウ科）

2006.5.12 正門前 1ex MY; 5.17 正門前 1ex; 5.21 正門付近 1ex; 9.7 武蔵野植物園付近 MY

オナガアゲハ *Papilio macilentus* Janson （チョウ目アゲハチョウ科）

2006.9.28 水生植物園 1♂

ここ数年まれに見られる。おもな食餌植物のミカン科のコクサギは園内にふつうに生育している。

ナガサキアゲハ *Papilio memnon thunbergii* von Siebold (チョウ目アゲハチョウ科) (図9,10)

2006.5.11 正門前 1♀ MY; 5.21 路傍植物園 1♂ KS, あずまや付近 1♂ KS; 7.9 正門前 1♂ 1♀ (交尾), 正門前 1♂; 7.13 教育管理棟付近 1♀ KK; 7.19 正門前 1♂; 7.30 正門前 1♂; 8.1 武蔵野植物園付近 1♂ TK; 8.3 正門前 1♂; 8.11 正門前 1♂; 8.23 イモリの池付近 1♂ SI et YK; 8.24 正門前 1♂ MY; 8.27 建物跡地 1♀ MY; 9.2 正門前 1♂, 食草園 1♂ MY; 9.3 水生植物園 1♂; 9.5 水生植物園 1♂; 9.15 水生植物園 1♂, 教研跡地 1♂; 9.24 水生植物園 1♂ 1♀ KS; 9.28 食草園 1♀; 10.26 食草園 1♂, 水生植物園 1♂ KS

本園では2003年以後毎年見られ(久居, 2004), 7月9日には正門前の樹上で交尾しているのが目撃された。また, 食草園ではジョロウグモに捕食されている雌も見られた。以前は雄を目撃する例が多かったが, 今回は雌も比較的良好に見られた。

モンキチョウ *Colias erate poliographus* Motschulsky (チョウ目シロチョウ科)

2006.3.18 建物跡地 1ex MY; 6.14 水生植物園 1♀; 6.15 水生植物園 1♀ KK; 6.29 水生植物園 1♀ CS; 6.30 水生植物園 1ex; 7.1 水生植物園 1ex; 7.27 水生植物園 1ex; 8.15 武蔵野植物園 1ex KK
ここ数年毎年のように目撃される。水生植物園のシロツメクサに産卵しているのが数回目撃されており, わずかながら増えているように思われる。

スジグロシロチョウ *Pieris melete* (Ménétrières) (チョウ目シロチョウ科) (図11)

2006.6.25 水生植物園 1ex SI

本種は以前は普通種であり(桜井ほか, 1972), 最近では個体数が少なくなったものの, 発生時期には時々見られた(久居・矢野, 2001)。しかし, この2~3年の間に急激に減少し, 今回見られたのは上記の記録のみである。皇居でも本種は1996年から2004年まで比較的ふつう見られたが, 2005年はわずか1個体目撃されたにすぎない(久居ほか, 2000, 2006)。このように激減した原因は不明であるが, 今後両地における本種の推移が注目される。

ツマキチョウ *Anthocharis scolymus* Butler (チョウ目シロチョウ科)

2006.4.1 食草園 MY; 4.4 教育管理棟前 1♂, 建物跡地 2♂, 水生植物園 2♂, 水生植物園東側湿地 1♂; 4.6 教育管理棟前 1♂, 水生植物園 2♂, 武蔵野植物園 1♂, 建物跡地 1♂; 4.8 正門前 1♂; 4.13 正門前 3♂, 建物跡地 1♀, 水生植物園 3♂ 1♀, 水生植物園東側湿地 2♂; 4.14 正門前 1♂, 建物跡地 1♂ 1♀; 4.18 食草園 1♂; 4.19 食草園 1♀, 水生植物園 1♀; 4.22 水生植物園 1♀, 食草園 1♂; 4.23 教育管理棟前 1♂, 水生植物園 2♂ 1♀, 教研跡地 1♂ 2♀; 4.28 教育管理棟前 1♂ 1♀, 建物跡地 2♂ 1♀, 教研跡地 1♀; 食草園 1♂; 4.30 正門前 1♀; 5.4 食草園 1♀; 5.5 建物跡地 1♀, 水生植物園 1♀

ここ数年は多くの個体が頻繁に目撃され, 前回同様タネツケバナやハナダイコンに産卵しているのが見られ, 個体群として安定した状態となっている。

ウラギンシジミ *Curetis acuta paracuta* de Nicéville (チョウ目シジミチョウ科)

2006.2.14 現業舎付近 1♂ KK; 6.13 水生植物園 MF; 7.27 教育管理棟前 1ex; 8.11 水生植物園 1

♂; 8.27 武蔵野植物園 1ex; 9.5 食草園 1♂; 9.24 水生植物園 1♂; 10.8 食草園 1ex, 建物跡地 1ex, 水生植物園 1ex, 教研跡地 1ex; 11.7 正門前 1♀

ムラサキツバメ *Narathura bazalus turbata* (Butler) (チョウ目シジミチョウ科)

2006.8.11 水生植物園付近 1♀ YK; 9.15 教研跡地 1ex; 9.24 食草園 1♂ MY, 水鳥の沼 1ex SI
個体数は少ないが2002年以後毎年目撃される。

ムラサキシジミ *Narathura japonica* (Murray) (チョウ目シジミチョウ科) (図12)

2006.4.22 食草園 1ex MY; 8.10 森の小道入口 YY; 8.20 食草園 1ex, 路傍植物園 4exs KK; 8.27 正門前 1ex; 9.15 イモリの池 1ex; 9.21 水生植物園 1ex, 路傍植物園 4exs MY; 9.24 武蔵野植物園 5exs SI, 森の小道入口 5exs SI, イモリの池付近 1♀ YK; 10.8 食草園 1ex; 10.18 食草園 2exs MY; 10.22 食草園 2exs MY; 11.4 武蔵野植物園 1ex

例年よりも複数の個体が目撃される例が多かった。

ミズイロオナガシジミ *Antigius attilia* (Bremer) (チョウ目シジミチョウ科) (図13)

2006.6.7 武蔵野植物園 YK; 6.28 建物跡地 1ex
本種も毎年のように見られ、園内で発生しているのは確実である。

アカシジミ *Japonica lutea* (Hewitson) (チョウ目シジミチョウ科)

2006.5.19 正門前 2exs; 5.24 正門前 1ex; 6.6 正門前 1ex; 6.17 正門前 1ex
2003年以後は毎年目撃されており、園内で発生しているものと考えられる。

トラフシジミ *Rapala arata* (Bremer) (チョウ目シジミチョウ科) (図14)

2006.4.18 食草園 1ex; 4.22 食草園 2exs MY; 6.29 水生植物園 1ex KK, 水鳥の沼 1ex CS; 8.3 イモリの池付近 1ex YK
本種も毎年のように見られる。

ベニシジミ *Lycaena phlaeas daimio* (Matsumura) (チョウ目シジミチョウ科)

2006.6.20 水生植物園 1ex; 6.29 水生植物園 1ex CS; 8.11 水生植物園 1ex YK
ここ数年明るく開けた草地でまれに見られる。

テングチョウ *Libythea lepita celtoides* Fruhstorfer (チョウ目テングチョウ科)

2006.4.6 水生植物園 1ex; 8.22 建物跡地 1ex MY
最近若干少なくなったように思われる。

アサギマダラ *Parantica sita nipponica* (Moore) (チョウ目マダラチョウ科) (図15)

2006.5.6 森の小道 1ex MYO; 5.10 正門前 1ex KS, サンショウウオの沢 1ex KS; 7.23 食草園 1ex KK; 8.24 正門前 1ex MY; 9.23 武蔵野植物園 1ex TK; 9.24 武蔵野植物園 (標識付) YK; 10.7 路傍植

物園 1ex; 10.8 水生植物園 1ex, サンショウウオの沢 1ex MYO; 11.1 正門前 1ex

本種は秋にタイアザミに吸蜜にくるものがよく見られる。今回は初夏から秋まで数個体が目撃された。また、9月24日には武蔵野植物園で標識付の個体が見つかった。この個体は、2006年8月28日に福島県北塩原村で標識され、放蝶されたものである。

オオウラギンスジヒョウモン *Argyronome ruslana* (Motschulsky) (チョウ目タテハチョウ科)

2006.8.1 イモリの池付近 TK

本種の記録は少なく、これまでに1983年9月と1995年10月(久居・矢野, 2001) および2001年6月(久居, 2004) に記録されているにすぎない。

ミドリヒョウモン *Argynnis paphia tsushimana* Fruhstorfer (チョウ目タテハチョウ科) (図16)

2006.5.11 水生植物園 1♂; 6.30 水鳥の沼付近 1ex TK; 9.24 水生植物園 1ex TK

個体数は少ないが、ここ数年毎年水生植物園で見られる。

メスグロヒョウモン *Domora sagana liane* (Fruhstorfer) (チョウ目タテハチョウ科)

1982.6.15 小鳥の森 1♀

記録がもれていた種である。本園職員の萩原氏が捕獲した個体が標本として残されている。

本園では1963年7月に1回雌が目撃された以外はその後の記録はない(桜井ほか, 1972)。世田谷区では1930年代に少ないが時々見られ、1960年代までは記録されている(福田, 1988)。このほか、都区内では江東区で1984年9月に1個体目撃されている(川嶋, 1984)が、最近の記録は少ない。

本種は平地～山地の樹木の周辺などに生息し、秋になると雌は山麓の市街地にも姿を見せる(福田ほか, 1983)。

ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius* (Linnaeus) (チョウ目タテハチョウ科)

2006.5.12 正門前 MY, 水生植物園 1♂; 5.17 正門前 1♂ MY; 5.21 正門前 1♂, 水生植物園 1♀ KS; 6.14 水生植物園 1♂ YY; 6.20 水生植物園 1♂; 7.4 正門前 1♀ MY; 7.7 正門前 1♂; 7.19 水生植物園 1♂; 7.27 水生植物園 1♂ 1♀; 7.30 正門前 1♂; 8.10 正門前 1♂; 8.17 正門前 1♀; 9.15 食草園 1♂; 9.21 水生植物園 2♂ 2♀ MY; 9.23 水生植物園 1♂ 1♀; 9.24 水生植物園 1♂ 1♀; 9.28 正門前 1♀, 食草園 1♀, 水生植物園 1♂ 1♀, 教研跡地 1♂; 10.8 正門前 1♂, 食草園 3♀, 水生植物園 1♂ 1♀, 教研跡地 2♂; 10.11 水生植物園 2♂ 1♀; 10.15 水生植物園 2♂ 1♀; 10.18 食草園 1♀ MY; 11.4 水生植物園 1♂

2003年以後は毎年見られ、年々増加する傾向がある。以前は水生植物園での目撃が多かったが、最近ではほぼ全域で見られるようになった。水生植物園や食草園などで産卵しているのが観察され、園内では普通種になりつつある。

ヒメアカタテハ *Vanessa cardui* (Linnaeus) (チョウ目タテハチョウ科) (図17)

2006.8.20 水生植物園 1ex YK

毎年ではないがまれに見られる。

アカタテハ *Vanessa indica* (Herbst) (チョウ目タテハチョウ科)

2006.4.6 教育管理棟前 1ex; 6.29 水生植物園 1♀ CS

個体数は少ないが毎年のように見られる。水生植物園や武蔵野植物園のカラムシなどに幼虫の巣が見つかることもある。6月29日の記録はメヤブマオに産卵しているが目撃されたものである。

ルリタテハ *Kaniska canace nojaponicum* (von Siebold) (チョウ目タテハチョウ科) (図18)

2006.4.22 水生植物園 1ex; 8.10 水生植物園 1ex YY; 9.7 水生植物園 1ex MY; 9.15 武蔵野植物園 1ex YK

クロコノマチョウ *Melanitis phedima oitensis* Matsumura (チョウ目ジャノメチョウ科)

2006.4.28 水生植物園付近 1♀ KS; 5.5 水生植物園東側湿地 1♀; 10.26 森の小道 1ex KS

今回は同一個体と考えられる秋型の雌が4月下旬と5月上旬に見つかり、園内で越冬し、繁殖しているのが示唆された。

コスカシバ *Synanthedon hector* (Butler) (チョウ目スカシバガ科) (図19)

2006.5.21 1ex YK; 8.28 水鳥の沼付近 1ex YK

本園ではスカシバガ類の記録は少なく、本種もまれに見られる程度である。成虫は年1回、5~9月に発生する。幼虫はサクラ類やウメなどの樹幹や主枝にもぐり、幼虫で越冬する。

シタキモモプトスカシバ *Melittia inouei* Arita et Yata (チョウ目スカシバガ科) (図20)

2006.6.28 水生植物園 SI; 6.30 水生植物園 TK et SI; 7.7 水生植物園 TK; 7.23 水生植物園 TK
有田 豊氏同定

本種は1999年に初めて記録された(大和田ほか, 2001)。その後は園内で目撃されることは少なかったが、今回は6~7月に水生植物園で吸蜜する姿がよく見られた。

クワコ *Bombyx mandarina* (Moore) (チョウ目カイコガ科)

2006.6.24 建物跡地 KK

幼虫での記録である。園内ではまれにヤマグワにつく幼虫が見られることがある。本種はカイコの野生型と考えられ、カイコとの雑種が容易にできる(井上, 1982; 杉, 1987)。国内での分布は北海道~屋久島である。都区内では赤坂御用地や皇居でも見つまっている(大和田ほか, 2005, 2006)。

オオミズアオ *Actias artemis* (Bremer et Grey) (チョウ目ヤママユガ科)

2006.6.2 教育管理棟裏 KK; 6.6 武蔵野植物園 KK

ヤママユガ科は本園でこれまでに6種が記録されている(国立科学博物館附属自然教育園, 1984)が、このうち現在も確実に見られるのは本種のみである。最近では若干増える傾向が見られる。

ヤママユガ科などの大型種が1980年代以後都心部で衰退している現象は、本園だけではなく目黒区の林試の森公園など各地で見られるという(大和田ほか, 2000)。

ウンモンズズメ *Callambulyx tatarinovii* (Bremer et Grey) (チョウ目ズズメガ科)

2006.6.17 正門前 1ex MYO

羽化したばかりの個体が見つかった。

本種は本州・四国・九州に生息する普通種で、幼虫はケヤキにつくことが多い(中臣, 1987)。本園にはケヤキが正門前や森の小道などに多く生育するが、本種が目撃されることは少ない。

ズズメガ科も多くの種が見られなくなった一群で、1952年の「昆虫目録」(鶴田ほか, 1952)には18種が記録されているが、1998年から2000年に行われた調査ではわずか3種が記録されたにすぎない(大和田ほか, 2001)。

アケビコノハ *Eudocima tyrannus* (Guenée) (チョウ目ヤガ科) (図21)

2006.2.21 カワセミ池付近 1ex MY; 8.14 水鳥の沼付近 (幼虫) YK; 9.3 武蔵野植物園 1ex

本種も少なくまれに見られる程度であるが、今回は上記の記録以外の情報もあり、比較的多くの個体が見られた。食餌植物のアケビやミツバアケビ・ムベは園内に多く生育し、幼虫も見つかっている。

フクラスズメ *Arcte coerulea* (Guenée) (チョウ目ヤガ科) (図22,23)

2006.4.28 水生植物園 1ex KS; 8.11 食草園 (幼虫)

成虫の目撃例はこれまでに少ない。幼虫は食草園のカラムシや路傍植物園のヤブマオなどについているのが時々見られる。食餌植物はイラクサ科であるが、まれにそれらに隣接するマルバウツギ(ユキノシタ科)、カナムグラやクワ・コウゾ(クワ科)などを食べる例が知られている(杉, 1982; 山本, 1987)。筆者は園内の路傍でタイアザミ(キク科)に幼虫が付いているのを見たことがある。

(2) その他

メスジロハエトリ *Phintella versicolor* (C.K.Koch) (クモ目ハエトリグモ科)

2006.5.5 水生植物園 1♀

本種は2002年に初めて見つかった(久居, 2004)。本園では比較的少ない。

ジムグリ *Elaphe conspicillata* (Boie) (トカゲ目ナミヘビ科)

2006.9.24 インセクタリウム内 1ex MY

本園では時々見られる。

ヒバカリ *Amphisma vibakari* (Boie) (トカゲ目ナミヘビ科)

2006.7.13 あずまや付近 1ex KK

2002年以後時々見られる。最近多少増えているようである。

タヌキ *Nyctereutes procyonoides* Gray (ネコ目イヌ科)

2006.4.18 水生植物園 KS; 5.3 教研跡地 YO

本種については、本園を紹介した古い解説書(文部省科学教育局, 1949)にその記述が見られる。しかし、その後は全く記録はなかったが、今回複数の目撃情報が本園職員や外部調査者などから寄せ

られた。

この個体がどのような経緯で園内に侵入したかは不明であるが、かなり長期間にわたって園内のいたる所に滞在したようすで、館跡では、本種のものと考えられる多くの体毛が採取された。

最近、東京の市部にハクビシンやタヌキなどが多く出没するといわれている（例えば、2006年11月29日付 朝日新聞朝刊の記事「ハクビシンなど目撃情報急増」など）。都内では千代田区の市街地で2頭が捕獲され、さらに隣接する皇居内でも多くの目撃情報があり、また、糞分析によって本種が生息する可能性が示唆された(Endo et al., 2000)。一方、赤坂御用地でも1990年代前半から本種が目撃されはじめ、2003~2004年の調査では少なくとも3頭が生息している（手塚・遠藤, 2005）。

引用文献

- 千葉県史料研究財団（編）. 2003. 千葉県産動物総目録. 千葉県の自然誌資料, 378pp. 千葉県.
- 千国安之輔. 1989. 写真・日本クモ類大図鑑. 308pp. 偕成社, 東京.
- 枝重忠夫. 1965. ハナアブ科. 「原色昆虫大図鑑第3巻」（朝比奈正二郎ほか監修）, 207-218. 北隆館.
- Endo, H., T. Kuramochi, S. Kawashima and M. Yoshiyuki. 2000. On the masked palm civet and the raccoon dog introduced to the Imperial Palace, Tokyo, Japan. Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo, (35): 29-33.
- 福田晴男. 1988. 移りゆく東京のチョウ. 「都市の昆虫誌」（長谷川仁編）, 135-178. 思索社.
- 福田晴夫・浜 栄一・葛谷 健・高橋 昭・高橋真弓・田中 蕃・田中 洋・若林守男・渡辺康之. 1983. 原色日本蝶類生態図鑑（II）. 325pp. 保育社.
- 浜田 康・井上 清. 1985. 日本産トンボ大図鑑, 第2巻解説編: 129-291. 講談社.
- 平嶋義宏. 1965. ハキリバチ科. 「原色昆虫大図鑑第3巻」（朝比奈正二郎ほか監修）, 307-308. 北隆館.
- 廣瀬 誠. 1998. 茨城県北部のヨコヅナサシガメの記録. 月刊むし, (331): 43.
- 久居宣夫. 1990. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(3). 自然教育園報告, (21): 11-21.
- 久居宣夫. 2004. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(14). 自然教育園報告, (35): 1-13.
- 久居宣夫. 2005. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(15). 自然教育園報告, (36): 21-29.
- 久居宣夫. 2006. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(16). 自然教育園報告, (37): 9-16.
- 久居宣夫・矢野 亮. 2001. 自然教育園の蝶類. 自然教育園報告, (33): 235-249.
- 久居宣夫・矢野 亮・久保田繁男. 2000. 皇居の蝶類. 国立科博専報, (36): 169-183.
- 久居宣夫・矢野 亮・久保田繁男. 2006. 皇居の蝶類相モニタリング調査(2000-2005). 国立科博専報, (43): 137-159.
- 井上 寛. 1982. ミノガ科, カイコガ科. 「日本産蛾類大図鑑第1巻解説編」（井上寛ほか著）, 158-162, 585-586, 講談社.
- 石田昇三・石田勝義・小島圭三・杉村光俊. 1988. 日本産トンボ幼虫・成虫検索図説. 140pp., 72pls., 105figs. 東海大学出版会. 東京.
- 岩田久二雄. 1978. 昆虫を見つめて五十年（I）. 331pp. 朝日新聞社.
- 岩田久二雄. 1980. 自然観察者の手記1. 285pp. 朝日新聞社.
- 岩田久二雄. 1982. 日本蜂類生態図鑑概説. 「日本蜂類生態図鑑」, 6-54. 講談社.

- 川嶋敬純. 1984. 都内および周辺の大型ヒョウモンチョウ類3種. 月刊むし, (166): 14-15.
- 国立科学博物館附属自然教育園. 1984. 国立科学博物館附属自然教育園動植物目録. 118pp.
- 三宅貞祥. 1982. 原色日本大型甲殻類図鑑 (I). 261pp. 保育社.
- 宮田 彬. 1983. 蛾類生態便覧 (上). 668pp. 昭和堂印刷出版事業部. 長崎.
- 宮武頼夫. 1977. テングスケバ科. 「原色日本昆虫図鑑 (下)」 (伊藤修四郎ほか編著), 全改訂新版, 157.
- 文部省科学教育局. 1949. 国立自然教育園概説. 42pp.
- 中臣謙太郎. 1987. イラガ科. 「日本産蛾類生態図鑑」 (杉繁郎編), 16-19. 講談社.
- 根来 尚. 1992. ヒロヘリアオイラガ *Latoia lepida* (Cramer) 富山県にも. 昆虫と自然, 27(2): 47.
- ネイチャーリーダー協議会 (編). 2003. 江東区PES(ポケットエコスペース) 昆虫類の生息状況調査報告書. 64pp., 2pls. 自刊.
- 新津修平. 2006. 関東地方におけるオオミノガの衰退. 昆虫と自然, 41(2): 9-11.
- 大原賢二. 2000. 皇居のハナアブ科. 国立科博専報, (36): 401-408.
- 大串龍一. 1987. セミヤドリガ. 106pp. 文一総合出版. 東京.
- 大野正男. 1991. 日本の帰化昆虫(2) ヨコヅナサシガメ. 自然誌研究雑誌, (1): 19-32. 日本自然誌研究会. 東京.
- 大石久志. 1998. ルーペで調べる身近な縞模様ハナアブの見分け方(4). 昆虫と自然, 33(11): 43-46.
- 奥野孝夫・田中 寛・木村 裕. 1977. 原色樹木病虫害図鑑. 365pp. 保育社.
- 小野展嗣. 2000. 皇居の庭園と濠のクモ. 国立科博専報, (35): 127-145.
- 小野展嗣. 2005. 赤坂御用地(東京都港区)の庭園のクモ. 国立科博専報, (39): 439-453.
- 小野展嗣. 2006. 皇居の庭園と濠のクモモニタリング調査(2001-2005)の結果一. 国立科博専報, (43): 407-418.
- 大和田守・有田 豊・岸田泰則・池田真澄・神保宇嗣. 2000. 皇居の蛾類. 国立科博専報, (36): 115-168.
- 大和田守・有田 豊・神保宇嗣. 2001. 自然教育園の蛾類. 自然教育園報告, (33): 251-280.
- 大和田守・有田 豊・神保宇嗣・岸田泰則・中島秀雄・池田真澄・新津修平・慶野志保子. 2005. 赤坂御用地の鱗翅類. 国立科博専報, (39): 55-120.
- 大和田守・有田 豊・神保宇嗣・岸田泰則・中島秀雄・池田真澄・平野長男. 2006. 皇居の蛾類モニタリング調査(2000-2005). 国立科博専報, (43): 37-136.
- 頼 惟勤. 1975. 自然教育園の蜻蛉. TOMBO, 18(1/4): 23-25.
- 頼 惟勤. 1978. 自然教育園の蜻蛉の目撃記録. 自然教育園報告, (8): 60-71.
- 三枝豊平. 2006. 天敵オオミノガヤドリバエで激減したオオミノガ. 昆虫と自然, 41(2): 2-3.
- 埼玉県昆虫談話会. 1999. 埼玉県昆虫誌別巻. 278pp. 埼玉県昆虫談話会.
- 斉藤洋一・大和田守・加藤俊一. 2005. 赤坂御用地のトンボ類. 国立科博専報, (39): 419-430.
- 斉藤洋一・大和田守・加藤俊一・井上繁一. 2006. 皇居のトンボ類モニタリング調査(2001-2005). 国立科博専報, (43): 383-406.
- 桜井信夫・久居宣夫・夏目節子. 1972. 自然教育園の蝶類について. 自然教育園報告, (3): 27-33.
- 佐藤力夫. 1987. 日本の植生環境と蛾類の生態分布. 「日本産蛾類生態図鑑」 (杉繁郎編), 245-254.
- 品田 穰. 1974. 都市の自然史. 200pp. 中央公論社.

- 自然環境研究センター (編). 2003. 新宿御苑動物相調査報告書. 34pp.
- 須田真一. 2002. 自然教育園のトンボ類. 自然教育園報告, (34): 107-130.
- 杉 繁郎. 1982. ヤガ科. 「日本産蛾類大図鑑第1巻解説編」 (井上寛ほか著), 669-913. 講談社.
- 杉 繁郎. 1987. カイコガ科. 「日本産蛾類生態図鑑」 (杉繁郎編), 119-120. 講談社.
- 須知 忍・石井 実. 1986. セミヤドリガの生活史の研究. I. ヒグラシの生活史との関係. 日本動物行動学会第5回大会発表.
- 手塚牧人・遠藤秀紀. 2005. 赤坂御用地に生息するタヌキのタメフン場利用と食性について. 国立科博専報, (39): 35-46.
- 鶴田総一郎ほか. 1952. 国立自然教育園動物目録第1集昆虫綱. 国立自然教育園基礎資料, (1): 1-42. 文部省国立自然教育園.
- 八木沼健夫. 1986. 原色日本クモ類図鑑. 305pp. 保育社.
- 八木下潤. 1994. 八丈島でヨコヅナサシガメとニイニイゼミを採集. 月刊むし, (286): 25-26.
- 山本博子・金沢 至・中谷憲一. 1998. 公園のミノムシ界の異変—消えたオオミノガ—. *Nature Study*, 44(2): 3-6.
- 山本博子・金沢 至. 2006. 大阪周辺におけるオオミノガの減少. 昆虫と自然, 41(2): 12-14.
- 山本光人. 1987. フクラスズメ. 「日本産蛾類生態図鑑」 (杉繁郎編), 231. 講談社.
- 山崎柄根. 2000. 皇居で見られた直翅系昆虫. 国立科博専報, (36): 19-27.
- 山崎柄根. 2001. 自然教育園で見られた直翅系昆虫. 自然教育園報告, (33): 323-329.



図2. オオミノガの蓑 (2006.3.15 撮影)

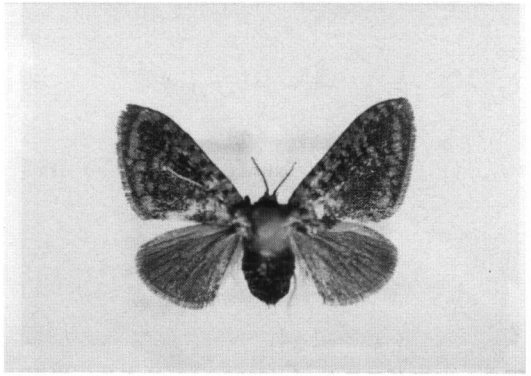


図3. 飼育で羽化させたセミヤドリガ
(大和田守撮影)



図4. 産卵中のヤブヤンマ
(2006.6.14 加藤武久撮影)

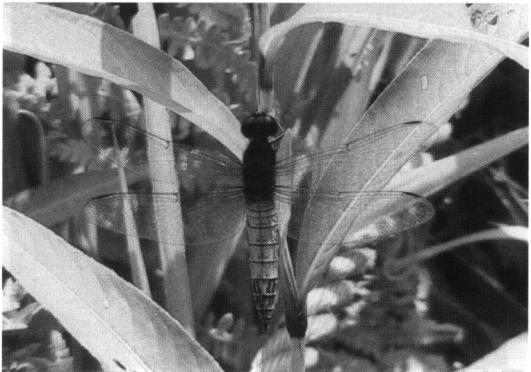


図5. ハラビロトンボ (2006.7.14 加藤武久撮影)

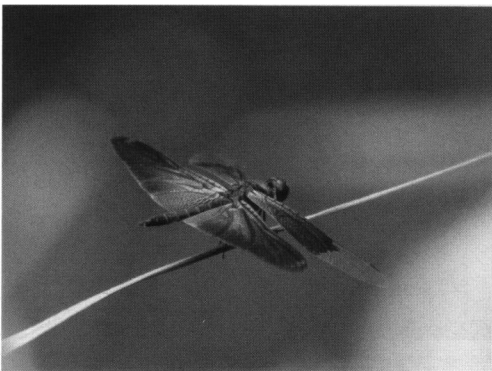


図6. チョウトンボ (2006.7.30 神森芳行撮影)



図7. トノサマバッタ (2006.10.19 神森芳行撮影)

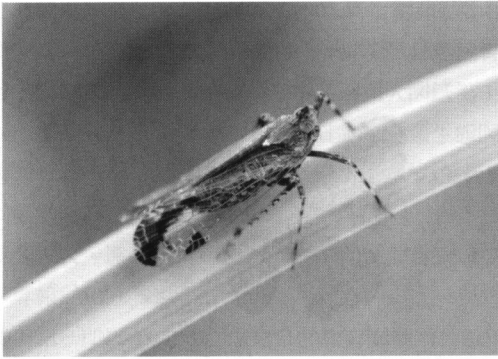


図8. ツマグロスケバ (2006.8.16 神森芳行撮影)



図9. 交尾中のナガサキアゲハ
(2006.7.9 神森芳行撮影)

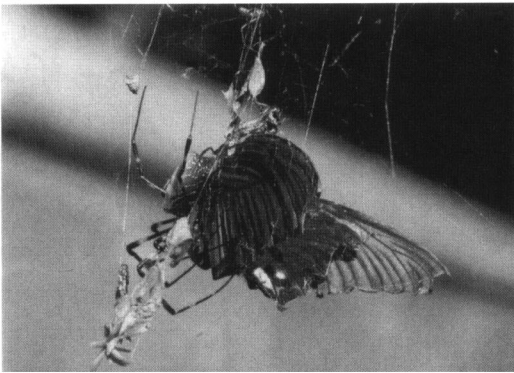


図10. ジョロウグモに捕食されたナガサキアゲハの雌
(2006.9.28 吉野由美子撮影)

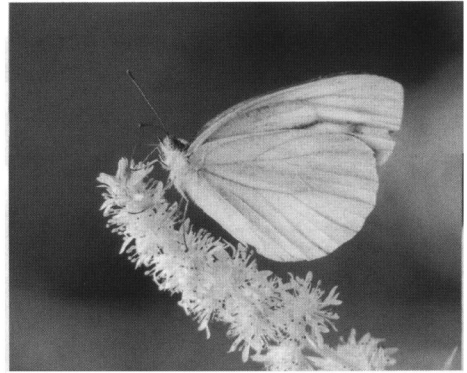


図11. 最近激減したスジグロシロチョウ
(2006.6.25 飯田晋一郎撮影)



図12. ムラサキシジミ (2006.9.24 神森芳行撮影)



図13. ミズイロオナガシジミ
(2006.6.7 神森芳行撮影)



図14. トラフシジミ (2006.8.3 神森芳行撮影)



図15. 標識を付けたアサギマダラ
(2006.9.24 神森芳行撮影)



図16. ミドリヒョウモン
(2006.6.30 加藤武久撮影)



図17. ヒメアカタテハ (2006.8.20 神森芳行撮影)



図18. ルリタテハ (2006.9.15 神森芳行撮影)

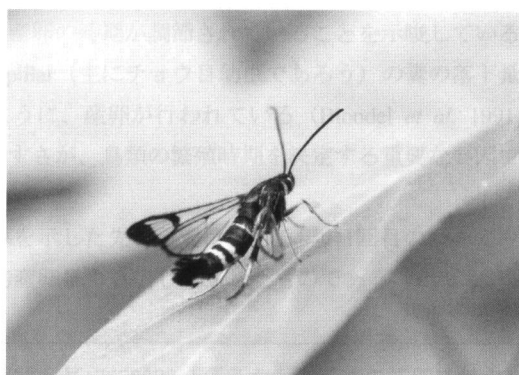


図19. コスカシバ (2006.8.28 神森芳行撮影)



図20. シタキモブトスカシバ
(2006.7.7 加藤武久撮影)



図21. アケビコノハの幼虫
(2006.8.14 神森芳行撮影)



図22. カラムシに付くフラスズメの幼虫
(2006.8.11 撮影)



図23. タイアザミに付いていたフラスズメの幼虫
(1998.5.14 撮影)